

など」と介護の連携だ。

しかし、一口に「訪問診療医」と言っても、「看取り」まできちんとやる医師もいれば、容体が悪化するとすぐ「救急車を呼んで」と病院に送ってしまう医師もいて、訪問診療はまさに玉石混交の世界。だから、入居者や家族が「医師は自分で選ぶ」くらいの気構えも必要となってくる。

### 「看取り」に取り組む新世代

自分の人生のフィナーレをどこでどうやって、誰と迎えるのか。それを入居前の面談で本人と家族に書いてもらい、「介護予防から看取りまで」の支援を行っているサービスピ付き高齢者向け住宅がある。運営しているのは、もともとはスチールパネルという工法で高齢者住宅の建設を請け負ってきた会社。初めて運営を手がけたサービスピ付き高齢者向け住宅で、「私はここで死ぬ」と女性居住者に言い張られたことをきっかけに、若い社長が「看取り」に真剣に取り組んだ結果だ。

千葉県鎌ヶ谷市で2011年にオープンしたサービスピ付き高齢者向け住宅「銀木屋」に、最初の居住者として入ってきた明子さん（76歳）は、末期の乳がん余命3か月を告知されていた。「病院は人の死ぬところではないから、ここに来た」というが、鉄鋼会社の2代目で「鉄屋」をずつ

とやってきた社長の下河原忠道さんは介護も医療もシロウト同然。「ここで死ぬと言われても……」と頭を抱えた。すると明さんはこう言った。「大丈夫。私が死に方を教えてあげるから」。実は明さんは地域の病院で看護師長までつとめた看護師だった。

「在宅で往診してくれる医師を探しなさい」「訪問看護師を探しなさい」「介護スタッフに覚悟を決めさせなさい」。明さんの指示に従い、文字通りスタッフが丸となって明さん的人生の終わりの3か月を支えた。最後まで生活を楽しむことをあきらめなかった明さんだが、やがて片目が見えなくなり、言葉も出なくなった。

医師と看護師を手配したものの、明さんはすべての医療を拒み、鎮痛剤すら打たなかった。深夜に下河原さんが彼女の部屋を訪ね、痛みについて聞くと、手を握り返して「大丈夫」と答えたという。静かに死に立ち向かう明さんに人生の最期の生きざまを見せてもらい、「人が自然に亡くなっていくことの大切さを知った」と、下河原さんは振り返る。

3か月で明さんが亡くなったあと、下河原さんは海外の高齢者住宅を見て回った。フランス、デンマーク、ノルウェー、ハワイの高齢者住宅……。イギリスではホスピスの草分けである聖クリストファー・ホスピタルを訪ね、死に向かう人の心のケアに感銘を受けた。そして、自分たちのつくる高齢者住宅は、「病院で死にたくない」人が安心して自室で亡くなることのできる「終の住みか」にしようとした。

現在、サービスピ付き高齢者向け住宅「銀木屋」は3か所、グループホームも2か所立ち上げた。

2軒目の市川市のサービス付き高齢者向け住宅では、がんやALSをはじめどんな病気をもつた人でも受け入れようと介護事業所に加えて訪問看護ステーションを併設。24時間対応の訪問診療との連携体制もつくった。介護スタッフには痰吸引の研修を受けさせ、入居者を最後まで支えることができるようにした。看取りに関するスタッフの勉強会も定期的に行い、これまで看取った入居者は20人を超える。

入居者が亡くなると、必ずお別れ会と「偲びのカンファ」というスタッフ・ミーティングを行う。お別れ会には入居者も職員も参加し、オペラ歌手の娘さんが歌をうたったこともあった。家族と話し合い、お別れ会は「なんでもあり」とする。

「銀木犀」では「看取り」ばかりではなく、介護予防にも力を入れている。高齢者の死亡の最大原因となる誤嚥性肺炎を防ぎ、最後まで食べられる口をつくろうと、常勤で歯科衛生士を採用し、口の健康と嚥下訓練を日常的に行うと同時に、内視鏡による嚥下機能検査も行うという。予防医学と看取りを暮らしの中に取り込んだ、稀有な高齢者住宅をつくりあげた。

介護の世界には、今、第三世代の新しい風が吹き始めている。71ページで紹介した小規模多機能型居宅介護「おたがいさん」を運営する神奈川県藤沢市の「あおいけあ」のように、従来のような「囲い込む介護」に異を唱え、「なんでもあり」の発想で高齢者ケアを地域づくりにつなげていこうという、若い世代の社会貢献型ムーブメントが、東日本大震災をきっかけに広がってきた。

そのムーブメントに連なる下河原さんも、「あおいけあ」から学び、近所の公園の清掃ボランティアをはじめ、居住者を地域に引っ張り出す機会をたくさんつくっている。認知症予防として学習療法も行ってきたが、音楽療法として注目されている「ドラムサークル」もいち早く取り入れた。みんなで輪になり民族楽器のドラムをセッションする、という楽しいアクティビティだ。

それを聞きつけた市役所から、鎌ヶ谷市のお祭りへの参加を依頼された。杖をついたり車椅子に乗って登場する高齢者の元気な演奏は評判を呼び、いまや地域のイベントから引っ張りだこ。居住者の生きがいづくりにもつながっている。

「銀木犀」では、ハードのものつ力も最大限に利用する。手づくりの扉を入ると花々の咲くアプローチガーデン。インテリアもモダンで居心地がいい。高齢者住宅では居住者が抱きがちな「施設に入れられた」という感覚を払拭したかったからだという。

居室は一人用が18・47㎡、20・73㎡で、16万4250円、17万3250円（家賃＋共益費＋生活支援サービス費＋食費）。入居時にかかる費用はない。介護保険サービスを利用する場合は、そこに自己負担分が加わる。

サービス付き高齢者向け住宅でも、こうした志の高いところが増えてくれば、最後まで安心して暮らすことができる。介護・看護・医療・介護予防が無理なく融合し、費用も比較的リーズナブル。これからの時代に求められる高齢者住宅と言えるだろう。

ちなみに千葉県では社会貢献型の高齢者住宅の先駆けとして、生活クラブ生協がUR団地の建て替え事業とのコラボなどで、サービス付き高齢者向け住宅「生活クラブ風の村」を4か所で展開している。診療所、デイサービス、訪問介護事業所、訪問看護ステーションに、児童デイサービス、カフェなどを併設・隣接したコミュニティケアの場だ。

◎「銀木犀」(鎌ヶ谷、市川、薬園台) <http://gimmokusei.net/>

(株)シルバークラウド…千葉県浦安市鉄鋼通り1-2-11 ☎047-304-4003

◎「生活クラブ風の村」(流山、高根台、稲毛) <http://kazenomura.jp/>

千葉県佐倉市王子台1-28-8 ちばぎん臼井ビル4F ☎043-309-5811

## 高齢者住宅のバリエーション

収入に応じた家賃で住めるケアハウス

資金がなくて、有料老人ホームやサービス付き高齢者向け住宅には入れない。しかし、健康面の不安が出てきて自宅暮らしがむずかしくなってきた……。そんなときの選択肢になりうる

のが収入によって補助のあるケアハウスだ。

これは老人福祉法で定められた「軽費老人ホーム」のひとつだが、収入に応じた補助がありながら、施設ではなく「居宅」とされている。「A型(食事つき)」「B型(食事なし)」「C型(ケアハウス)」の3タイプに分けられていて、いずれも、ひとり暮らしや夫婦だけの暮らしに不安のある60歳以上の人が対象だ。

軽費老人ホームは全国に約9万2000室があり、その85%がケアハウス。ケアハウスといっても原則的には「ケア」がついているわけではない。食事、入浴サービス、生活相談やレクリエーション、緊急対応などのサービスを受けながら、できるだけ自立して暮らし、介護が必要になれば自宅と同じように外からヘルパーの訪問を受けたり、デイサービスに通ったりできるが、要介護度が高くなった場合は退去を求められることもある。

ケアハウスは民間参入のできる福祉住宅なので、建物、内装、広さも金額も、実にさまざま。一見、有料老人ホームと変わらないものもあり、広いLDKの居室もある。数は少ないが「特定施設」の指定を取った「介護付きケアハウス」(要介護1以上)もあり、こちらのほうは「終の住みか」にすることも可能だ。

ケアハウスでは訪問診療を入れることができるが、医療に関しては入居規制のあるところが多く、痰の吸引、胃ろうなどの経管栄養、尿管カテーテル、酸素吸入のような医療措置が必要な人は断られる場合もある。入居後の入院で医療措置が必要になった場合も、退去を求められ